

「存在していないものの存在」

創世記 第1章 1節～5節
ローマの信徒への手紙 第4章 17節

説教 上山耕平伝道師
(大和キリスト教会伝道師)

私たちは人生の節目で問います。『自分は一体何者なのか?』と。創世記1章が記された背後には、そう問わざるを得ないイスラエルの民がいました。彼らの国がバビロンの侵略によって滅ぼされたのです。正に「地は混沌であって、闇が深淵の面に」(2節)ある、そのような時代です。虚無感や疑い、挫折が渦巻く中で、自分たちの根拠をもう一度確かめ直すようにしながら、天地創造の由来が語り出されるのです。「初めに、神は天地を創造された」(1節)と。

地が混沌としており、闇が世界を覆っている。私たちを取り巻く状況も同じでありましょう。自分の周りに、そして自分自身の中に混沌や闇がある。私たちは、それらを抱えながら生きて行かなければなりません。その中であって、私たちは神様に問うのです。『なぜ混沌や闇があるのか?』。それに対して聖書は語ります。「光を造り、闇を創造し／平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである」(イザヤ書 45章7節)。これを読む限り、神様は闇も、災いも創造された方であることが分かります。しかし神様は、闇や災いでもって私たちを滅ぼそうとされているわけではありません。「かわいい息子を懲らしめる父のように／主は愛する者を懲らしめられる」(箴言 3章12節)のです。すべては愛に基づいている。そして「苦しみ悩ますことがあっても／それが御心なのではない」(哀歌 3章33節)のです。

ここで注目すべきは、闇や災いではなく、神様が創造されたものの中で、何を「良しとされた」ということでもあります。神様は混沌や闇を「良し」とはされたわけではありません。「光を見て、良しとされた」(1章4節)とされたのです。その神様が、私たちのことを『光の子』と呼んで下さっている。つまり私たちもまた「良しとされた」ということです。

私たちは、自分で自分を「良し」とする生き方が当たり前だと思いながら生きています。自分で自分を「良し」としないと、自分を保てない。そんな社会の中で生きています。そうでも

しないと、自分の価値がたちまち分からなくなってしまふからです。しかし聖書は言います。“もう自分で自分を『良し』とする必要はない”と。神様の方で、もう「良し」と認めてくれている。私たちがどれだけ自分で自分を「良し」と思えなくても、神様にとっては「良し」なのです。

神様は光を現され「良しとされた」後に、「光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれ」(5節)ます。名前を付けるんですね。万物は神様に命名されて、この時初めて存在することになるのです。ローマの信徒への手紙4章17節に「存在していないものを呼び出して存在させる神」とあります。地を創られた神様は、存在していないもの、つまり混沌や闇の中にある形のない虚しい状態の中にあるものを、「呼び出して存在させる」のです。

私たちが信じている神様は、私たちの名前を呼ぶ神様です。『おい、そこの人間!』とは呼ばない。名前を呼ぶのです。具体的です。個人的です。人格的です。私たちにも、それぞれ名前があります。それが神様に呼ばれる時がある。それが洗礼を受ける時です。クリスチャンになる時、私たちは牧師を通して、神様に名前を呼ばれるのです。この呼びかけによって、初めて私たちは、神様の前にあって存在するようになるのです。神様に呼び出されて存在させられるようになります。

私たちの存在、私たちの価値、それは私たちが、自分で自分を認めてようやく在るというものではありません。それは、もう既に与えられているものです。神様の呼びかけによって。神様の『呼び出し』は日毎に新たなものです。どれだけ地が混沌であろうが、闇が覆っていても、それらが私たちを否定しようが、それを打ち破る神様の「良し」という御墨付が、私たちにはあります。

(記 上山耕平)